海外視察

私の履歴書

藤井雅俊

⑩

一九六〇年（昭和三十五年）の安保闘争は食べるのに困らなくなった時代の始まりを象徴している。池田内閣の所得倍増政策で、日本は大衆消費社会へと突き進む。流通業界は大激動の前夜だった。

小売業の新しい担い手が台頭し、貪欲に学んだ。花形企業の東レの会など、様々な勉強会も生まれた。日本NCR（ナショナル金銭登録機）の"ブレンド・ナショナル"は代表的なもので、世界的企業が握る最新の業界情報を求めて多くの同業者が集まった。

NCRが主催した海外視察旅行に参加したのは自然の成り行きだった。欧州経由で北米大陸を横断する約四十日間の世界一周旅行に旅立ったのは六一年の春だった。

復興は軌道に乗っていたものの、古い街並みを残し、伝統的な落ち着いた社会を再建していた欧州よりも、やはり米国に圧倒された。六〇年代は古き良きアメリカの全盛期だ。米国の第一印象は、とにかく豊かな大衆消費社会の素晴らしさで、この夢を日本でも実現したいと思った。

ニューヨーク、ワシントンを半ば観光気分で回った後、NCRの本社があるオハイオ州デイトンに数日間滞在した。そこで目にしたものは盛

米の競争社会に衝撃

チェーンストアの時代を予感

考必衰、生々流転の競争社会の過酷なまでの現実だった。

中心市街地の商店街は櫛の歯が欠けたようで「貸店舗」の看板が目立つ。目抜き通りの百貨店は閉店後二年たち、「ここに素晴らしい店が開店します」とショーウインドーに張り紙が出たのは一年前。デイトン駅は廃虚のように人気がなく、一日数本の列車が通るだけと聞いた。

モータリゼーションによる車社会への地滑り的移行が地域社会に残した爪跡だった。商業の中心は完全に郊外のスーパーマーケットやショッピングセンターに移っており、郊外立地の大型店は売り場面積の五倍の駐車場を併設しているのが当たり前だった。

NCR本社で開かれた近代商業講座は日本勢以外に、ドイツ勢など世界中から百人以上の参加者が受講した。主催者の計らいで講師に直接話を聞く機会も得たが、百聞は一見にしかず。シカゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ハワイに立ち寄り、帰国するまで、デイトンで目にした光景を何度も反すうした。

1961年の欧米視察（最後列左から3人目が筆者）

戦勝国と敗戦国の彼我の豊かさは隔絶していたが、土地の広大なところを除けば、いずれ日本もアメリカの後を追う。ならば、これからは百貨店の時代ではなく、セルフサービスのチェーンストアの時代になる……。出発前までは固かった百貨店の目標は大きく揺らぎはじめた。

その後、何度も海外視察に出掛けたが、よくアクシデントに遭遇した。第一回のその時は、羽田空港に着陸した日航機が滑走路をオーバーランして大破する事故に遭い、もし火災が発生していれば助からなかったといわれた。

七九年には幹部役員が海外視察旅行中の深夜に大山店（東京都板橋区）で火災が起きた。通信手段が不便な時代で、テレックスで連絡を受けた私は、帰国するまで焼けたのは新築工事中の小山店（栃木県小山市）だと思っていた。幸い類焼を免れ大事には至らなかったが、東京都で最も長く燃えた火事といわれた。留守の私に代わり、家内の伸子が商店街へのお詫びのあいさつ回りなど、大車輪の活躍をした。

（イトーヨーカ堂名誉会長）